「ねぇヴィスク。私たちって結婚するの？」
「――は？」
夕食の席で、言葉少なに食事を終えて、ふと、私はずっと気になっていた疑問を口にした。
私がヴィスクに捕まって、一歩も家から出してもらえないまま、そろそろ半年くらいになる。
私はとっくに諦めているけれど、ヴィスクは未だに私が家から逃げ出そうと画策していると信じ込んでいるみたいで、玄関には何個もカギをかけるし、ドアの隙間には毎朝律儀に紙を挟んでいる。
私がドアを叩きながら助けてくださいって叫んだら、振動で挟んである紙が落ちるという仕掛けなんだけど、酔っ払いが外からドアを叩いても紙が落ちるので、いい加減にやめてほしい。
事故で紙が落ちるたびにお仕置きされるのもうんざりだし、うんざりしすぎて抵抗しなくなった私を抱きながら、自分が傷つけられてるみたいな顔をするのもやめてほしい。
ヴィスクは知ってるはずだ。
虐待から逃げられない人間が、どんな風に感情を殺していくか、孤児院の院長としていくつも見てきているはずだ。
このあたりが限界だと、お互いにわかってる。
ヴィスクは私を壊せない。
私のことが本当に好きだから。
だから最近なんて、寝室に果物ナイフを置いてみたり、わかりやすいところに縄を放り出しておいたり、寝る前に私の目の前で睡眠薬を飲んで「僕は絶対に目を覚ましませんよ」とばかりにアピールしたり、露骨に「逃げてくれ」と言外の主張を始める始末だ。
ヴィスクはどうしても、私に殺人犯になってもらいたいらしい。
でも私は、ヴィスクを殺したりなんかしたくない。
二十五年前、私に花葬祭で花を贈りたいと、耳まで真っ赤になりながら打ち明けたヴィスクの愛を、私は今も覚えてる。
ヴィスクが孤児院を出て、いろんな人と出会って、それでも私を選んでくれると決めたとき、花を贈りに来てくれるのを楽しみに思った自分の心を覚えている。
ヴィスクは食器を洗う手を止めて、恐怖に引きつった目で私を見た。
「オーリ。結婚はお互いの同意がないとできないんですよ。僕が一方的に宣言するだけでは婚姻関係は結べない」
「知ってる」
「だから僕たちは結婚はしないんです」
「そうなの？」
「そうなのって……」

ヴィスクは洗い終えた食器を棚に戻して、手をふいて、平静を装って私に向き直った。
その目は私を責めるみたいだ。
「まるで僕と結婚してもいい、みたいな口ぶりですね？」
「してもいいよ」
「――は？」
本日二度目の「――は？」だ。
私は食卓にお行儀悪くひじをついて、珍しくうろたえているヴィスクをじっと見る。
「っていうか、私、ヴィスクに一回も結婚してくれって言われてない」
「そ……れは……」
「花もくれないし」
「か、花葬祭は、まだ先ですし……」
「だとしても、寝室にナイフを置いたり、縄を放り出しておいたり、わざとらしく睡眠薬飲んだりするより先に、やることがあるんじゃない？」
お姉さんぶって言った私の言葉に、ヴィスクは恥じ入るように頬を染めてうつむいた。
「き……気づいてないのかと……」
「私、そんなにバカっぽいかなぁ」
ため息を吐いて、私は天井を見上げた。
「気づいてたのに……僕を殺さなかったんですか？」
「普通、そう簡単に人なんて殺せないと思うけど」
「それなりに切迫した状況だ。君は僕に監禁されて、凌辱されてるんですよ？　僕を殺してでも逃げ出したいと思うのが普通です」
「そうだとしてもさ」
私はテーブルの上に中指と人差し指を立てて、軽快に躍らせる。
躍らせた指は、これまたテーブルにわざとらしく放置されている果物ナイフに行き当たる。私はそのナイフを手に取って、ひたと自分の首にあてた。
「こっちを選ぶ可能性もあるじゃない？」
「――オーリ、だめだ！」
叫んで、ヴィスクは私に駆け寄ると、私の手からナイフを取り上げた。
ナイフの刃を握って取り上げたせいで、その手からはパタパタと鮮血がしたたり落ちている。
「殺されるより先に、私が自殺するかもって、思わなかったの？」
「君は……そんなに弱い人じゃない……」
「どうかな？　ほーら、ナイフを取り上げても舌噛んじゃうぞー」
「オーリ！」
泣きそうな声で私の名前を呼んで、ヴィスクは私を抱きしめた。
抱きしめたって、舌を噛み切るのは止められないのに。

ヴィスクはすごく狡猾なのに、時々とても間が抜けてる。
「やめてください、どうか……自分を傷つけることだけは……」
「やらないよ。やるならヴィスクが見てないところでやるし、宣言する前にやってるし。宣言しちゃったってことは、二度とやらないってこと」
「……本当に？」
「だって私が自殺しようとしてるって知ったら、ヴィスクは私のこと氷漬けとかにしそうだし」
「なるほど、やりかねない」
「やらないでよね」
私が軽く肩を押し返すと、ヴィスクは素直に応じて体を離した。
私はナイフで傷ついたヴィスクの手を取って、血まみれの手のひらをぺろりと舐める。
「だめですよ、オーリ。汚い」
そう言いながら、ヴィスクは私を力ずくで振り払えずにいる。
すっかり血を舐めとると、傷は思ったより深くなくて、切れ味の鋭さも相まって、一晩もすれば傷はふさがりそうだ。
私はそんなヴィスクの傷を指先でつっとなぞる。
爪を立てるとまた傷から血があふれて、ヴィスクは苦しげに奥歯を噛み締めた。
「……これは復讐ですか？」
力なく笑って、そんなことを言う。
私は微笑み返した。
「そうかも。でも、全然足りない。もっと復讐しなくちゃ」
「そうですね……そう。僕は本当に、君にひどいことをしている」
「復讐させてくれる？」
「君の復讐ならいつだって、喜んで受ける気でした」
「殺しちゃったら、長く苦しめられないよね」
「あぁ、確かに」
「それに、そばにいないと復讐できない」
「オーリ、僕は……」
「だから結婚してもいいかなって」
「ッ……はは……」
泣き笑い。
ぱたたと、ヴィスクの目から涙があふれて、私たちの手に滴った。
きれいな涙。
なんてずるい。
私はヴィスクの眼鏡をはずして、その涙をぬぐってあげる。

「ひどい人だな、君は……そうやって僕に希望を持たせて、もてあそんでるんでしょう？歩み寄るふりをすれば、僕から逃げられると、そう思って――」
「私、待ってたの。ヴィスクが私にお花を持ってきてくれるの」
「そ、んなこと……信じるわけ……」
「孤児院から出たがったのも、ヴィスクから逃げたかったからじゃない。ちゃんと自立して、一人で生きられるって証明して、みんなと……ヴィスクと対等になりたかっただけ。そういう気持ち、ヴィスクならわかってくれると思うんだけど」
ただ伝えればよかったことを、私は伝えなかった。
だってヴィスクはもう、十分に私に時間を捧げてくれた。
二十五年もの時間を奪った私が、さらにこの先もヴィスクの時間を奪い続けることを、当たり前のようには受け入れられなかった。
ヴィスクは責任感が強いから、私がそばにいたら絶対に守ろうとしてくれる。
だから一度離れて、もう私は一人で大丈夫だとヴィスクに教えてあげたかった。私から解放されてほしかった。
そう、私が勝手に思ってた。
そしてヴィスクをズタズタに傷つけた。
傷ついて、歪んで、壊れて、許されない行動に出たヴィスクが怖くなかったと言えば嘘になる。
酷いことをたくさんされた。
ヴィスクの帰宅が怖くて泣いた。
私の存在がヴィスクをこれ以上壊すなら、私はなんとしても逃げ出さなければと思ってもがいた。
だってもし私を殺してしまったら、私を壊してしまったら、ヴィスクは二度と立ち直れないから。
でも、ヴィスクは踏みとどまった。
世間的に言えばとっくに踏み越えてしまったのかもしれないけれど、私は生きているし、壊れてもいない。
ヴィスクは私が逃げ出すことを望みながら、私を逃がせなくて苦しんだ。
苦しみ続けるヴィスクを見ているうちに、私の中から恐怖も消えた。
かわりに私の心にあふれた感情は、憐れみと愛しさだ。
私はヴィスクの唇に指を這わせる。
「ヴィスク。口を開けて。舌を出して」
「どうして……」
「質問は許可してませんよ？」
ヴィスクの口調を真似して言うと、ヴィスクは苦しげな笑みを浮かべで、私の命令に従った。

おずおずと唇から忍び出てきた舌に、私はそっと舌を絡める。私の気持ちをヴィスクに教え込むように。
唾液が溢れてこぼれるほど深く口づけるうちに、ヴィスクは私の髪を撫で、私の体に触れようと首筋に指を這わせはじめた。
私は叱るようにその手を軽く叩いて唇を離す。
「それはまだダメ」
「すみません、つい……」
「こらえ性がない両手は縛っちゃおうか？　ベッドに縛り付けて一日放置したら、ヴィスクはどんな顔するの？」
「――試してみたい？　いいですよ。オーリがそうしたいなら」
「うーん。私はヴィスクみたいな変態じゃないしなぁ」
冗談めかして言うと、ヴィスクは困り果てたような笑みを浮かべる。
こういう表情をしていると、私をベッドに押さえつけて、めちゃくちゃに犯すようなひどい人にはとても見えない。
人間の二面性って怖いなぁ。
「ねぇ、やり直して」
「やり直す……って……どうすれば……」
「私のこと好きって言って」
「それは毎日言ってるでしょう？」
「ああいう押しつけがましいのじゃなくて」
「お、押しつけがましかったですか……？」
「だって私の返事なんていらない感じの〝愛してる〟だった」
ヴィスクはざらりと口元を撫でて、私の足元にひざまずくと、私の両手を握ってじっと私を見つめる。
だけどいざ口を開くと、言葉は何も出てこない。
困惑するヴィスクの頬を撫でて、私は笑った。
「ほーら、言えないんだ」
「い、言えます……！　今、言いますから……！」
「待ってる間に、私がおばあちゃんになっちゃいそう」
「からかわないでください……！」
「がんばれヴィスク。がんばれ」
ヴィスクの手は震えている。
私を見つめる目は熱く潤んで、ほのかに赤くなって子供みたい。
三十九歳のヴィスクが、私の目には十五歳のあの頃と同じに見える。
「オーリ……君を愛してる」
「うん。――だから？」

「だ、だから……？」
「監禁させてください？」
「違います。違う……そうじゃなくて、僕は……」
「うん、教えて。本当はどうしたかったの？」
私が外で仕事を見つけてくると伝えたとき、ヴィスクがひどくうろたえたことに私は気づいていた。
だけど「許可できない」というヴィスクの言葉に、私は反発してしまった。私もヴィスクの隣に立てるような大人でいたかったから。
だけどヴィスクは私が無力な少女だということを、存分に私に思い知らせた。
そして私は、大人の男の力を恐れた。昔みたいに怒って叱ればよかったのに、泣いて逃げて無力さを示してしまった。
話し合うことを避けて、私を怖がらせたヴィスクを罰するみたいに反発を続けて、そしてここまできてしまった。
もし、私が間違えなかったら、ヴィスクは私にどう接していたんだろう。
私がヴィスクの間違いを正しく叱れていたら？
ヴィスクは唇を舐めて湿らせる。
唾液を飲んで乾いたのどを湿らせて、慎重に言葉を選んだ。
「君、を……幸せに……したい……幸せに、したかった……ッ」
ヴィスクは苦しげに、絞り出すように言った。
私の手を握る手に力がこもって、少し痛い。
でも私はヴィスクの手を振り払わなかった。
今、自分が吐き出した言葉と、自分がやってきたこと――それがどれほど相反してるか、ヴィスク自身が一番よくわかっている。その痛みに苦しんでいる。
私はヴィスクを助けてあげたい。
「今からでも、私を幸せにできる？」
ヴィスクは私の手を握ったまま、弱弱しく首を左右に振った。
「僕にその資格はない……」
「資格って、誰が決めるの？」
「それは――」
「私以外に、誰が？」
私はそっと、ヴィスクから片手だけ取り返して、その柔らかな黒髪を撫でた。
目を閉じると、子供のころの穏やかな時間が戻ってくるみたい。
「ねぇ。私が逃げないか心配なんだったら、私を鎖に繋いでもいいよ。でも、この家に閉じ込めないで。私、ヴィスクと一緒に外を歩きたい」
「鎖に繋ぐなんて、そんなこと……もうしません。二度としない」
「うん、信じる」

「愛してる……本当に……愛してる……愛してる……」
それは謝罪みたいな愛の告白だった。
愛してしまってごめんなさいって、ずっと謝ってるみたい。
私はヴィスクの顔を上向かせて、唇を重ねた。
応じたヴィスクの舌と唇は私に縋るようで、子供みたいな必死さがある。
舌を絡めながら、私はヴィスクのシャツのボタンをくつろげた。
あたたかな素肌に指を這わせると、ヴィスクは私のスカートに手を差し込んで、焦るみたいに下着を脱がせてしまう。
「オーリ、ベッドに……」
「うん。つれてって。いつもみたいに」
ヴィスクは私を抱き上げると、キスを繰り返しながら寝室になだれ込んだ。
私をベッドに横たえると、もどかしげに上着を脱ぎ捨てて、私の腰を引き寄せる。
この半年で男の体に慣らされきってしまった私の体は、性急ともいえるヴィスクの行為を拒むどころか、喜んで受け入れた。
お互いに半分服を着たままで足を絡めあい、腰を揺らす動物的な欲望に、私たちは酔ってるみたいに熱中した。
私を支配するとき、ヴィスクはいつもたっぷりと時間をかけた。
私が泣いて叫んで縋り付くのを楽しむように。
だけど今日は違う。
お互いにお互いが欲しくて、余裕なんて少しもなくて、まるで衝動に突き動かされて初めて体を重ねるみたい。
きっと私が眠ったりしなくて、大人になったヴィスクが私に花を贈りに来たら、私たちはこんな風に、初めての夜を迎えたんだと思う。
「オーリ……オーリ、あぁ、許してください、どうか……許して……」
「うん……許す、許すよ……大丈夫、許してあげる……全部、私が……ふ、ぁ……！　あぁ……ッ！」
激しく腰をゆすりあげられて、私はあっけなく果てて喉を反らせた。その喉にヴィスクの舌がべろりと這って、私はぞくぞくと腰を震わせる。
ヴィスクは私の体を抱え上げて、ベッドに座った自分の腰に座らせた。
向かい合って座るような形で奥を突かれて、私は「あぁ」と声を上げてヴィスクの肩に縋りつく。
汗で張り付いた私の前髪をかき上げて、ヴィスクは私の耳に舌を這わせるように囁いた。
「もう少し……いいですか？　もう少しだけこうしていたい……」
「いつも、嫌って言っても続けるくせに」
「そんな風に意地悪を言って……僕を煽ってるんですか？」

「そうかも――あっ……んぅ……！」
「オーリ、僕を見て。ほら、キスを」
「んぅう……ふ、ぅ……！」
舌を絡めながら下から激しく突き上げられる感覚に、私は自分を保てなくなる。
いったばかりなのに体はさらに大きな快楽を欲しがって、私はヴィスクの動きに合わせて腰を揺らした。
絡めた舌の先で、ヴィスクの呼吸が苦しげに跳ねて、じっとりと汗ばんだお互いの体が溶け合っていく。
ひどく服が邪魔に感じられて、私がほとんど引き裂く勢いでヴィスクのシャツを脱がせると、ヴィスクも私のブラウスを脱がせて、お互いの境界線が分からなくなるくらい強く抱き合う。
「愛してる……愛してる、オーリ……愛してる……ぅ、あぁ……！」
ヴィスクが切なげに唇を震わせて、私の一番奥にどろどろに溶けた欲望を吐き出した。
私は無我夢中でヴィスクの背中に爪を立てて、私の正気を奪う快楽の濁流にのまれないように、ぐっと歯を食いしばる。
乱れて跳ねた息が整うまで、私たちは絡み合った彫像みたいに、お互いを抱きしめたまま動かなかった。
私の方が先に動くと、ヴィスクは私をいたわるように、そっとベッドに横たえてくれる。
くすくすと、私は笑った。
「最初からこうならよかったのに」
「本当に……この半年は、悪夢の中にいたみたいだ」
「今が都合のいい夢なのかも？」
「だったら一生覚めなければいい」
私たちはお互いに額を合わせて、恋人同士のキスをする。
とろりとまどろみが忍び寄ってきて、私はヴィスクの胸にすり寄った。
抱き寄せてくれる腕の暖かさが心地よくて、そっと目を閉じると、そのまま眠りに引き込まれそうになる。
「愛してるよヴィスク……私も愛してる」
「ありがとう。――お休み、僕の眠り姫」

ＥＮＤ